

正木多津夫は萩原朔太郎か

——「ハガキ文学」の投稿作品から——

藤 田 福 夫

朔太郎の初期作品についてはこれまでに伊藤信吉、久保忠夫、佐藤房儀らの諸氏により紹介されて来た。

筆者はそれらとは別に後に記すような、住所が萩原方となっている正木多津夫名義の文章七編、短歌二首を数年前、投書雑誌「ハガキ文学」（日本葉書会発行）の明治四十年、四十一年の誌上で見出した。それは朔太郎の二十一歳、二十二歳の頃である。以来それらを写しとったノートを時折開いて朔太郎作でないかと考え続けて来たが、ここにそれらを紹介し、考えるところも記して識者のご示教を得たいと思う。

朔太郎作品でないかと思つた最初の契機は後に紹介するように、三篇の文章および歌一首の作者名の上に小さく角書されている住所が「前橋市北曲輪町萩原方」となっているからである。これは勿論朔太郎の生家のある地名である。しかし萩原家で医業を手伝っていた、朔太郎の従兄栄次も文学雑誌「新声」への投書家であつたと言われている。さらにもまたこの時期に一時的に萩原家の薬局などに投書家の青年が居たのでないかとも想像される。そうした理由から正木多津夫なる人物の住所表記が「前橋市北曲輪町萩原方」とあるだけで、これが朔太郎であると速断はできないの

である。以下投書作品について内容や用字の面から考察を加えたい。

「写真に添えて」の手紙文は女性の立場で書かれており、男子の投書はがき文としては異様であるが、幼児の描写には後年の朔太郎の詩に見られるような女性的な柔軟な皮膚感覚的なものが見出される。

「真ひる」は夏の真昼の白日下の虚無感、生ぬるい風の皮膚感覚が朔太郎風であり、白洋傘、白い葉裏を見せる柳の木の点出は色彩的、素材的に後年の朔太郎詩を思わせるに十分である。また「昏迷殆ど死す」という瓊音の評言はよく特色を捉えたものである。

「寒い日」では冒頭の「灰色の雲がひくう垂れて木々の葉が妙に白くぼく見える。」が朔太郎の詩の諸篇に見える虚無的空白風景を思わせる。写されている女性に見られる被虐性にも朔太郎の性格が投影していると見ることができよう。

「秋は逝く」では「白い小さい虫が暗い部室を飛びまはるのが」見えるという異様な恐怖感「暗い人世を迷つて迷ひ疲れてそして死んで行く」という意識は「氷島」の「漂泊者の歌」の過去より未来にわたってさ迷いゆく人間の不安な家郷喪失感にそっくりである。さらに「熱い涙が流れた。」は朔太郎の諸詩にしばしば強く滲んでいる異常なまでの悲傷性を思わせる。

「晩秋一日」の墓場風景には後年の朔太郎の詩に見るような無気味な幻想性と白色の持つ空虚感が見られる。さらに快晴の秋の日に対する心細さと言ひ、晩秋の冷風に対する恐怖感と言ひ、神経質な若い日を過ごした朔太郎の筆になると思われる点が指摘される。

「寒い日に」の「大地は湿りををびて、ゆるんだかのやう、押せばブクブクする」には湿潤な病的異常感覚があり、「小猫の奴、追つても追つても火鉢の側へばかり寄つて来る。陰気な日だ、淋しい日だ。」には例えば後年の朔太郎

の「蒼ざめた馬」に見られるような払い切れない強迫観念的なものがうかがわれる。

「病みて」は青年期の朔太郎の作として見る時、可なり少年じみた立場を装って記されていると思われるほどに、甘やかされて育った人間の孤独さがうかがわれる。朔太郎は母や祖母に極端に愛されていたといわれているが、そこに生じた依存性の強い性格がよくうかがわれる文である。

短歌二首の中ははじめの一首は新詩社調も残っているが、生あたたかい風の中に自己を見出している点に朔太郎らしい被抑圧的感覚が認められる。この歌に「人の心の黒き反面」を認めた太田水穂の評言はさすがに卓見である。

あとの一首は上記「萩原朔太郎の短歌」中に紹介されている次の歌に似た一面がある。

利根川の河原を歩めば

石ころが我れに踏まれてさどめきあへり

〔未発表作品〕習作集八巻

右の一首と「ハガキ文学」のものとは場面に昼夜の差はあるが、同じ利根川の河原とその石ころに取材したもので同一作者の作と考えることができ、「純情小曲集」の詩「利根川のほとり」の胚芽でもあろう。

さらに用字的な面であるが、「晩秋一日」で白張の「灯提」と記されている。七篇の文章には可なりの誤植と思われるものが含まれているが、この「灯提」は作者の誤記のままと思われる。それは既に知られている明治三十九年四月「晩声」発表の短歌〔萩原朔太郎の短歌、佐藤房義編、伊藤信吉補、短歌昭和四十三年二月号に於ける。〕「窓に寄る」の第一首目に「燈灯のまへに君あり……」とあり、編者によって（ママ）と傍記されている。「晩秋一日」は明治四十一年十二月の発表であり、「窓に寄る」は同三十九年四月の発表であるが、このほぼ同じ時期に朔太郎はちようちんの正しい漢字表記を誤まることが多かったものと思われる、用字面から見ても「晩秋一日」は朔太郎作と判断してよいようである。

以上七種の文章と短歌二首の内容ならびにちよ、ちんの漢字表記について正木多津夫は萩原朔太郎であろうと推測する。抛りどころを記した。投書家として仮装する意識が動いている点があるが、基底には作者の体質が根づよくわたかまっている。沼波瓊音、橋本春郊などの評言は必ずしも朔太郎の異常な体質を見抜いているとは言えないが、賞を与えて高く評価している点は他の投書作との間に何らかの異色な特徴を感じとったものと思われる。もしこれらが朔太郎の作であることが確定されるならば、その特性は二十歳台初頭に既に十分芽生えていたと言えよう。これらはその新詩社風短歌よりははるかに個性的なものを示しているのである。

正木多津夫が朔太郎であるならばそのペンネームはどういう着想で考えられたものであろう。いろいろ推測したが現在のところ確かな答を得ていない。ただこの「正木」という姓は朔太郎の友室生犀星が後年、小説「告ぐるうた」(單行本、昭和三年七月刊)の中心人物の詩人に与えた正木年彦のそれと同じである。これは単なる偶然の一致であろうか。この頃の「ハガキ文学」誌上には若い犀星の金沢時代の友人、表植影の詩歌も見られるので、あるいは犀星に朔太郎が正木姓をもつて投書していたという記憶があり、後に大成した詩人の姓とするにふさわしいと考えたためであらうか。

次に「ハガキ文学」誌上の正木多津夫名義の作品を紹介する。つとめて原表記のままとしたが、漢字のみ新字体に改めた。はじめに当該作品の掲載されている欄の名称と選者名を「」に入れて記し、批評文の添えられているものはそれを付記した。最後に（ ）内に作品掲載の「ハガキ文学」の刊行年月と巻号数を記した。原文につけられている、○◎などは省いた。なお本稿を記すに当って友人藤本徳明氏にご意見をもとめた点があることを記し謝意を表したい。

「ハガキ文 橋本春郊選」

写真に添えて(海外なる夫の君へ)

前 橋 正木多津夫

御留学になつてから、丁度三度目の秋です事ねえ。こちらは庭の萩が美しく咲きました。それから、俊雄——見ちがへる様でせう。これは此の間うつしたんですの。まあ頬の肥えました事。「父さん」と云ひたさうな、この可愛らしい口元を見て下さい。

この小さな、紅葉のやうな手に、赤い旗を持たせて、お迎ひに出るのも、もう八ヶ月ばかり。楽しみに待つて居ますわ。

〔詞藻欄 普通文 沼波瓊音選〕

（秀 逸）

真ひる

ヂリ（まひる）と砂のやける音。

乾物屋の經節の匂が乾いた空気に漂つて居る。千金丹と大書した白洋傘の中から出る、功能（つと）読み上げる太いダミ声の声尻（しり）が妙にふるへて、格子越しの家の中はしんとして人の気は少しも無い。犬が長い舌を出して、苦し（くる）さうにあへぎながら行つて、バタ（た）とたるさうな靴の音が、白洋傘と共に町はずれで消えると、あとは柳がうなだれて白い葉裏を見せて居るばかり、只時々生ぬるい風が凸凹の街路の砂を巻いて、下へ下へと吹いて行く。

（評） 昏迷殆ど死す。

〔明四一、九「ハガキ文學」五ノ九〕

〔詞藻欄 普通文 沼波瓊音選〕

（地賞）

寒い日

前橋市北曲
輪町萩原方

正木多津夫

どんよりと曇つた寒い日だ。灰色の雲がひくう垂れて木々の葉が妙に白つぽく見える。

(此奴が)と隣の四十格構の男は其の側に腰をかけた二十二三の青白い女を鬚の願で指して(昨夜不意に逃出しやアがつたんで、本庄まで追かけてよう／＼取締め、今連れて帰る所なんでしょう)と憎々しげにギョロリ白眼んだ。(ふん。大分世話をやかせるな)相手の男は怎う云ひながら其の太い首を女の方へ捻向けた。乗客は一樣に女を見る。女はヂツと膝に置いた細い手を見つめた儘動きもしない。馬車は木立を抜けた。(こりやア雨がやつて来るぞ)と一人が不意に叫んだ。乗客は皆外を向く。女はそつと眼をふいた。

(評)女の何者たるかを説かぬところなど凡手でない。
抱へ主の憎げな様子もよく現はれてゐる。

同

(秀逸)

秋は逝く

前橋 正木多津夫

あたりはだん／＼暗くなつて来た。

私は灯をつけようともせず、唯淋しい淋しいで、訳も無く其処へべつたりと坐つてしまった。もう身動きするのも厭。

外には秋の雨がしと／＼と降つて居る。

石の陰で鳴いてゐるのだらう、こほろぎの細い声が途絶々々に聞える。桐の落葉をたゞく雨の雫が、妙に淋しい響を伝へて来る。

おゝ！ 秋は逝く。斯くして秋は逝くのである。

白い小さい虫が暗い部室(マ)を飛びまはるのがほの見える、一寸先も解らぬ、暗い人世を迷つて迷ひ疲れてそして死ん

で行く——と思つた。何とはなしに熱い涙が流れた。こほろぎは未だ鳴いて居る。

(評) かげろうのほのめくよりもはかなき飯の世のたのむ心なりけり

(明四一、一一「ハガキ文学」五ノ一二)

〔日記文 編集局選〕

天賞

晩秋一日

前橋市北曲輪町
萩原方

正木多津夫

十一月五日。好天気だが心細い日だ。見慣れた墓地に今日は新墓が一つ増いた。削り立の墓標。白張の灯提が。光沢の無い、褐色に枯れた土堤の上に、いやにきわ立つて目につく。見つめて居ると、遊い野中に白衣の人が立つてゐる様にも見えて淋しい。落ち残つた夕日に輝いて居る柿の樹に居た鳥が二羽舞ひ上つて、グル／＼と輪を畫いて北の方へ飛んで行つた。鳥の影の消えたあたり薄暗りの空に淡い赤を放つてゐる星——夫が吐き出す息が、冷い風と化して晩秋の山野を縦横に吹き枯して、やがては吾等の襟下を襲つて来るのだらうと思つて、自然頭が縮かまつた。

夜、蒲團にくるまつて居ると、算を漏る雫や、風なくして散る落葉の音が夢のやうに聞えてくる。秋は逝くのだ！と思ふと妙に淋しさが胸にせまる。

目を瞑つて見る、新しい墓標——白張の灯提 鳥——星……

評 晩秋淋の気自らあらはれ人に迫る、取材は平凡かも知れぬ日常事平凡多し、日記の妙味は叙述にある、十六行中無駄なく晩秋の淋しさの繪てを悉して居る。

(明四一、一一「ハガキ文学」五ノ一三)

〔ハガキ文欄 橋本春郊選〕

地賞

寒い日に
前橋市北田
輪町萩原方

正木多津夫

落ちかゝつた雨が途中で遮ぎられたやうな空の色だ 大地は湿りををびて、ゆるんだかのやう、押せばブクブクするだらう。

水車の音がどツしりとして響かぬ。

風は少しもない。窓側の鉢植の紅葉が、力なくうなだれてゐる。

柿の落葉が、音も立てずこぼれた。

小猫の奴。追つても追つても火鉢の側へばかり寄つて来る。陰気な目だ、淋しい日だ、寒い日だ。こんな日に君はどうしてゐるか？ 是非出掛けたまへ。熱いお茶をたてゝ待つてゐる。失敬。

評 これも上手に気持が表現されてる。

〔明四二、一二。〕「ハガキ文学」五ノ一三

〔詞藻欄 普通文 沼波瓊音選〕

(秀逸)

病みて
前橋 正木多津夫

『せめて着物だけでも』といふ優しい母の心を汲んで私は着物を着替へた。『お祝ひだから……』と雑煮の柔かい処を下さる。気は進まないが箸をとつて見る、汁は苦い。一寸口をつけて止した。『お前はもう宜いの……』母の声は曇つて聞えた。『え……』と答へたまゝ、又冷い床へ這入つた。母は音もたてず食事をすましてしまふ。南の障子に初日(ついで)が彩やかに映つて来た。

と外の方はだんぐ(マ)賑やかになつて来る。羽子の音、まりの音、はてはドツと笑ひくづれる声……。あゝ世は春だ！と思ふと云ひ知れぬ哀愁が犇々と胸に迫つてくる。私は一寸其処まで行つてくるから——退屈だらう(マ)から是でも見ておいで』新着の新年雑誌を枕元へ近く寄せて母は出て行つた。私は母の足音が門口で消えると、その本をとつて犇と顔へおし当てた。

そして心ゆくかぎり泣いた。

(評) 記する所寧ろ平凡なり、しかも惻々人を動かすものあり

(明四二、一「ハガキ文学」六ノ二)

○ 和歌欄 太田みつほのや選

天賞 前橋市北曲輪町 萩原方 正木多津(マ)

ぬるき風は黄の花あさる若人のくろかみ吹いて野尻に消えぬ

(評) ひかりをのらふ(マ)人の心の黒き反面かのろくしくもうたひ出されてゐる。よい着想だ

(明四一、九「ハガキ文学」五ノ九)

○ 和歌欄 太田みつほのや選

(秀逸)

前橋 正木多津夫

星一つ北に光りて石つよく河原の面を風白う吹く

(明四二、一「ハガキ文学」六ノ一。)

—昭五二、一〇、八記—

〈本学教授〉